

---

# -片思い同士-

momoco

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

-片思い同士 -

### 【ZPDF】

Z1698D

### 【作者名】

momooco

### 【あらすじ】

友達を続けてきたけれど、お互いに好きなことは間違いなかった。  
一言で、関係は変わると思った。

## 向かう気持ち

このままもう2度と会えなくとも、絶対忘れないって誓う。

悲しい予感が怖くて逃げた。

あのころは、逃げるほうが悲しいことだつて、気づかなかつた。

車を走らせるのは好きだ。

特にこれくらいの時間。

夕闇が迫つて、後ろから何かに追いかけられそうなのスリル。

向かうは好きな女の子の元、とあつては気持ちが高ぶるのも仕方なかつた。

車内の時計は6時40分。

7時の待ち合わせには遅れずにつきそつだ。

彼女のためにとつた、免許。

彼女のために買った、車。

今日こそ、告白するつもりだった。

相手も自分のことを、好きでいてくれると思う。

女の子に興味なんてなかつたケイジは自分の新たな一面に驚かされていた。

この町が好きだ。

大都会でも、田舎でもない。

レジャーランドや宿所は少ないけれど、それでも必要なものはそろつてゐる、この町。

刺激なんかなくても、生きていけばいい。  
彼女と一緒に生きていければ最高だ。

今、その夢が叶いかけている。

一芝のワンピースがちょっと窮屈だった。

歩き出していく。「

静電気みたいに体にぴたりと吸い付く毛糸の感触が気になつて、モモコは足を止めた。

着替えに戻つても待ち合せには間に合ひやうだけれど、せっかくの食事だ。

新しい服を着たい、とこつ気持ちが勝つて、また歩き始める。

ケイジと初めて会つてからは4年を超えるが、出会った当初より今のはうが相手を好きだと思つ。

なんに関しても飽きっぽく、面倒くさがりの自分が恋愛に関しては根気強い。

奇跡みたいなだな、と思つた。

でも、モモコは知つていた。

その関係が、新たな局面を迎える瞬間が近づいている、といつひとを。

## 4年前～ケイジ

4年の月日はあまりに長い。  
ケイジはため息をつく。

出会いは本当に偶然で、涙が出るくらい普通のものだった。

4年前、7月

ケイジはつい二ヶ月前に入社した会社で、大いにやりがいを感じていた。

仕事は楽しかったし、残業も嫌じやなかつた。

でも、ビアガーデン初日ばかりは仕事も早めに片付け、同期の男三人で飲みに出掛けることを決めていたのだ。

緩めた胸元に汗が流れるのを感じながら、ビールを一口。

幸せだ、と思う。

学生時代は毎日が酒盛りのようなもので、それに比べたら飲む機会は少なくなつたのだけれど  
今の方が一杯のうまさを感じる。

同期の一人も同じように満足げな顔をしていて、ケイジはますます  
気分よくジョッキを半分空けた。

三人がビアガーデンに来て一時間。

初日ということもあって客席はほぼ満員だ。

「仕事、はやく切り上げてよかつたな」と囁くケイジに、他の二人も激しく同意した。

ビアガーデンとは不思議な場所だ。

ところ狭しと並べられたテーブル、すぐそばで大笑いする人々、開放的な空間。

普段ならこんなにうるさくて近くに他人がいる場所で食事する機会はないだろう。（社員食堂は別かな）

自然とケイジたち三人も大声で笑い、たわいないお喋りに興じていた。

そんな時。

同期の一人、タツミの後ろからにゅっと手がのび、タツミの肩を掴んだ。

タツミが驚いて声も出ず振り向くと、女の子が一人、疲れきった笑みを浮かべていた。

## 4年前～モモコ

4年前、7月

とんでもなく暑い日だった、気がする。

そうだ、ビアガーデン初日だったのだから。

モモコはその日休んだ先輩の分の仕事が終わらず、やむなく残業することになった。

一緒にビアガーデンに行こうと約束していたカナコには申し訳なかつたけれど

「一時間くらい本屋で待ってるよ」

と言つてくれたので、残業の後は予定通り飲みに行くことにした。

一時間の差はすごかつた。

一人がついたときにはもう人、人、人…

空いてるテーブルなど一つも見当たらない。

「「めんねカナコ、あたしが残業だったから…」

肩をすくめるモモコをものとせず、カナコは座席を探して人の波に入っていく。

モモコはすでにビアガーデンを諦め、別な店を考えていた。

(ここからなら歩いて十分くらいのところに、おいしいイタリアンがあるから…)

すでに騒音と人の多さにげんなりしていたモモコは、カナコに声をかけようとした。

その時。

カナコが近くの席の男性の肩に手をおいたのが見えた。

驚いたのは肩をつかまれた男性だけではない。

彼と一緒にテーブルにいた二人（男三人のテーブルだった）も、もちろんモモコもぎょっとした。

カナコは笑顔で言った。

「スズキ君！ お願い、相席させて。」

こわばつていた男性の顔がみるみる笑顔になった。

「なんだ、ハマさんかあー」

聞けば彼はカナコと同じ学校だったという、いわゆる同級生ってやつだ。

全員同じ年だと言つ」ともあり、モモコもすんなり溶け込むことができた。

スズキ君というカナコの同級生がつれていた他の一人もとても親しみやすく、全員で携帯のアドレスを交換した。

またみんなで飲みに行こうと言つて別れ、帰宅したモモコはケイジからのメールを受け取った。

その日から一人の  
「友達付き合い」  
が、はじまった。

## キモチの問題～ケイジ

出掛けたイタリアンの店はヨーロッパ風の真合だ。

ケイジはさつそくメニューの一覧をのぞきこむ。

イタリアンに目がなじのも、モモコとの大きな共通点だった。

うわ…

モモコが呟く。

「おこしゃうだね！」

目を輝かすモモコに領き、パスタとワザニアを注文するし、やつと落ち着いてモモコの事を見ることができた。

「あれ、ワンピース、かわいいね」

ケイジが皿つとモモコはこいつを笑つて領ぐ。

「なんとオロシタテ。」

オロシタテ。

だいじんおひしではないことは想像がつくが、ひとつだけ考える。

モモコは察したのか、付け加えていった。

「今日ははじめて着るの。見たことないでしょ？」

確かに、週一回以上のペースで「飯を食べたりカラオケにいつたり（最近は車も買ったのでドライブもできるようになった）しているけれど、その服は見たことがない。

なんだか炊き込みご飯みたいな優しい色で（こわゆるベージュ？）、おつとりした外見のモモコに似合っていた。

「見たことない、似合つじやないか」

誓めると、今日一番の笑顔を見せたモモコは、ビニールパックに入ったおしほりを渡してくれた。

機嫌がいい証拠だ。

これなら今日の告白も成功だ、と思つたケイジの手に、飛び込んできた人影があつた。

「あ……」

声にならない声をあげて一点凝視のケイジを見て、モモコもひりと後ろを振り返る。

（うわ、見ないでくれ！）と願つが時すでに遅し。

モモコの手もその人物

ケイジの元彼女を、とらえたようだった。

ゆっくりと首を回してケイジを見据えたモモコは、

「挨拶しなくていいの?」と囁く。

4年前、まだモモコと知り合った時には付き合っていた彼女。

モモコを好きになつて、別れを選んだ彼女。

モモコはその元彼女を見たことがあるし、別れたときももちろん報告した。（なぜ別れたかまでは報告できなかつたけれど）

前は「一ジャスにまいていた髪を、今はセザンヌとストレートにして、4年前よりちょっと幼く見える。

向ひのは女一人。

ケイジは別れた彼女と親しくするつもりはなかつたので、

「いや、むしろ見つかりたくない」

と肩をすくめた。

モモコの目がちょっと見開かれ、何かいいかけたように見えた唇は時間が止まつたかのように動くことはなかつた。

## キモチの問題～モモコ

「いや、むしろ見つかりたくない」と肩をすくめるケイジを、モモコは凝視した。

(そんなに嫌な思いでもあるのかしら…)

そういうばケイジが別れた理由を聞いたことがなかった。

別れたという報告をうけたあと、何度も聞きたいとは思ったが。

ケイジの元彼女が、一いち方に気づかず（もしかしたらもう忘れたのだろうか、それとも気づかないフリだろうか？）離れた席に座ったのを確認して、モモコは言った。

「4年もたつてるから聞くけどさ、ケイジってどうして彼女と別れたの？」

瞬間的にケイジの顔がこわばるのが見えた。

(しまつたなあ…)

やつぱりなんかされたんだろ？  
例えば浮気とか…

そこまで考えて、モモコは過去の自分を思いだしきれ、いそいでその思い出から離脱した。

取り消したくても口から出た言葉はもつ戻らない。  
モモコは返事を待った。

「うーん…特に理由はなくて、ちょっとびりわがままだけきれいでいい子だったんだ。でもなんか、そうだなーマンネリっていうのかな？」

心が沈むのがわかった。

確かにすごく綺麗な女性だった。

もう一度振り返りたい気持ちを必死に押さえる。

「お互いに何かしら感じてたんだと思う。違和感みたいな…決定的になにかあったわけじゃないんだよ。」

話し続けるケイジの声が遠く聞こえた。

モモコは過去の自分に蟻地獄のように飲み込まれる心を感じながら、ケイジに向かつて微笑んで見せた。

## 探りあい～ケイジ

ほつとしていた。

モモコが急に彼女と別れた理由を聞いてきたときはびっくりしたけれど、こわばつていた表情が戻つていらっしゃしてくれたときには全身から力が抜けたようだつた。

今になつて汗が噴出してきた気がして、モモコはちられなつうに手のひらの汗をぬぐう。

(過去のことなんだから・・・今はモモコがすきなんだけどなあ)

思いをこめてモモコを見つめるが、モモコは笑顔を浮かべたままリブルを見つめていた。

その肩が、震えたように見えてケイジは皿をこらしたが、特に変わった様子はない。

見間違ひだったのだらう。

そこまで考えて、ケイジは今日の出来事のことをめぐらした。

(うーん・・・さつきまではいい雰囲気だったけど・・・)

モモコはまだ顔を上げない。

(やっぱり元彼女と会つた後に告白するつてのもなあ・・・)

これからだつてチャンスはめぐつてくれるだらう。

せっかく4年もかけて作り上げた関係だ。

ちょっとでもマイナスの要素があつた今日せ取りやめるべきかもしれない。

でも、とケイジは思ひ。

(「こんなことがあつた今日だから皆丘したまつがいいだらうか?」)

モモコも自分のことを好きでいてくれるとしたら、今日まちゅうとショックを受けているかもしれません。

そんなことないよ、モモコが好きだよ、と

こうこいつときこひ言つてあげるべきなのかもしれない。

モモコはかたくなにメニューを見つめている。  
デザートのページを見ているから、食事が終わつてすぐ戻さよなら、  
とこつこつむりではないらしい。

わざわざまで浮かんでいたはずの笑顔がもう逆えているのぶと氣づ  
き、ケイジはあわててモモコに話しかけた。

「モモコ」

モモコは最初、焦点が定まらないような目つきでケイジを見た。

その目に恐れを見たような気がした。

(おびえてる・・・?)

ケイジがいぶかしげな表情になつたのだらう、モモコはまつとした  
ようだ

「デザートも食べようかなーー!」

と明るく話し始めた。

「あーこのパスタもよかつたねー、これも、これもおいしそうー。今度は車でこないでお酒飲むのもいいねーーー！」

空元気、といふ言葉がぴったりなその様子を見て、ケイジは思い出した。

モモコの過去の恋愛を。

自分はモモコに「どうして彼女と別れたの？」  
ときかれ、なんと答えるだろう・・・・・・?

取り繕うことに必死で、何も考えていなかった。  
胸の中でシャボン玉がはじけたようだった。

今日の畠中上、と、ケイジの心で判断が下された。

## 探しめぐらセセロ

気持ちが沈むのを止める術はなかつた。

ケイジの顔もこわばつてゐる。

あー、やつぱり態度に圧せつた…

氣づいたけれどもつねに。

モモコは安堵する覚えていた。

(やつぱりまだ誰かと向き合つのは、気持ちがついていかないかも  
しれない)

心が揺れていた。

明るい声を出してみても顔色が戻らないケイジに、モモコは正直に  
話すことになった。

「ケイジ……なんか氣にじてるでしょ?」

「モモコさん、俺無神経すぎ……」

用意してあつたような返事。  
やつぱり氣にしてた。

「俺、ちょっと動搖してた。別れた理由は一言で言えなくて、あんな風にじこまかした。ごめん。」

頭を下げるケイジ。  
謝らなくていいのに。

「ケイジ、あたしの…前の事、覚えてる？話したのは四年も前だね。」

「 もううん。」

その目に真摯な思いを見た気がした。

多分ケイジは、ほんとに何も考えずに返答したんだろう。

「なんで彼女と別れたの？」

『気にするな、気にするな、と  
モモコの中の誰かが言つ。  
でも。

モモコは感じていた。

もうケイジの事、好きになるのが怖くなつた。

ケイジだって、あたしみたいに過去を引きずつてまとめて異性と付かぬえない女なんてやめたほうがいい。

友達でいてくれるだけでありがたいんだ。

ネガティブな気持ちが押し寄せてきた。

たぶんこれは、モモコがケイジを本気で好きだったから。

これ以上はダメだ。

ケイジは爽やかで明るく、仕事も楽しんでやる模範的な男性だ。

失いたくない。

## 恋に落ちたとき～ケイジ

ケイジは心から後悔していた。

絶対、もう思い出させないぞ、って思つてたのに。

モモコの過去を聞いたとき、彼女は笑顔を作ろうと必死だった。でも、あふれてくる涙を止めることは成功しなかった。

ケイジはモモコが泣くのにまかせ、ただ話し終えるのをまつっていた。

4年前の、冬だった。

モモコと2人の食事は6回目だった。

夏に知り合つて、最初はメールだけだつたけれど

その後何度も、ビアガーデンで一緒に飲んだ5人で飲む機会があつた。

5人の集まりが3度目を迎えた後

それまで、女の子にそこまで興味があつたわけではなく

「彼女はほしいし、向こうが好きでいてくれるのだから自分も」  
くらいの気持ちで付き合つてきた彼女と別れた。

そんな気持ちで何年も付き合つてきたのだから  
今となつては申し訳ない気持ちで

だから、前の彼女には会えない、というのが本音だ。

モモコは、おとなしかつた。

もちろん盛り上がりに水をさすわけじゃないけれど話しかけられるまでは自分から話題を提供するようなことはなかつた。

タクミの同級生だというカナコという女性は反対にひとつでも明るい人で

常に彼女を中心として話題は動いた。

カナコがモモコを守つているよつた、なんだか不思議な取り合せだった。

カナコは華やかな美人だし、モモコもおとなしみではあるけれど聰明さを持ち合わせたまなざしがきらきらして見れば見るほど惹かれる。

ケイジがモモコに恋をしたのは、5人の集まりの2回目だったもうか。

タクミがモモコとカナコに、

「彼氏は？いるんでしょ？？」

ときこたときだつた。

1回目のはときは場の空気を壊すことを感じて誰もできなかつた質問だけれど、だいぶくだけてきたからだね」、タクミは今思に出した、という雰囲気で気軽に質問した。

「いない」

答えたのはカナコだ。

そのあまりにきつぱりとした態度に男3人はあつけにとられた。

ケイジやタクミと同期の（男3人最後の一人）トモキは、カナコに惚れていたようだったので、そのきつい言動にびっくりしたのか、目が普段の2倍くらいになっていた。

カナコを包んでいた華やかなオーラは消えうせ、かわりに凜としたするどいオーラが彼女を包む。

ケイジはこんなときにもかかわらず、チエックカーの「ヤー わるもの嘘つけた・・・」という顔を思い出していた。

（うひゃー、禁句だつたんじゃないの？ まづこよ・・・）

カナコは賢い女性だ、場の空気が凍つたのを察すると、とたんにこいつとして

「あんまりひどい」ときくんだもん。しばりしないのよ~ 気にじてるんだから~」

なんておどけて見せた。

男サイドもほつとして、「いや、ばかー高嶺の花なんじゃねーか?」なんて軽口をたたく。

ケイジもほつとした。

トモキなんて、目が潤んで泣きそうになりながらうんうん頷いている。

モモコを見ると、彼女はカナコの後ろに隠れるよつとしていた。蒼白だ。

「大丈夫?」と声をかけようとしてどどまる。

カナコが男サイドから見えないような角度で、モモコのひじをさすつてあげていた。

何かあるんだ、とわかつた。

何もきかないことに決めて、またテーブルに視線をもどし、今までどおりカナコとの軽快なトークに加わった。

モモコの蒼白な顔は、どんな女性よりケイジを惹きつけた。

なぜか、どんな笑顔よりも女らしさを感じたのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1698d/>

---

-片思い同士-

2010年10月26日05時25分発行